

カントウータ

Cantuta No. 9

平成 18 年 5 月 28 日発行
社団法人日本ポリビア協会

協会からのお知らせ

定時総会開催のお知らせ

来る 6 月 23 日(金)午後 3 時より、当協会の事務所のある第 1 西脇ビル会議室において定時総会を開催します。多くの会員の皆様のご出席をお待ちしております。

総会の資料については 5 月下旬までに発送するよう現在、準備中です。

また、総会の案内とともに本年度の会費の納付書を同封しますので、よろしくお振込みのほどお願いします。

春の叙勲

元サンファン農牧総合協同組合長加藤重則さんが旭日単光章を授章されました。

長年にわたる自治体および農協の活動にご尽力された功績を評価されてのことです。

ポリビアンチャリティゴルフ -オキナワ大会参加者 120 名-

去る 3 月 19 日沖縄県嵐山カントリークラブにおいて、当協会と沖縄ポリビア協会の主催・ならびに在沖縄ポリビア名誉領事館の共催で、「コロニアオキナワ支援チャリティゴルフ大会」を開催しました。オリオンビール・金秀グループ・沖縄ツーリスト・沖縄タイムス・琉球新報等々の多くの沖縄のリーディングカンパニーの協力を得て、赤嶺 JA 沖縄会長・呉屋ペルー名誉領事・嘉手苅ポリビア名誉領事をはじめとして総勢 118 名の出席を頂き盛大な大会となりました。

昨年のこの大会が縁となり生まれた「いではく作詞・ミヤギマモル作曲」の『愛しき島よ』『オリオンの星』の 2 曲もミヤギマモルさん本人が歌われ披露され、好評を博していました。

また 572,011 円という多額のチャリティ資金となり、ワルネス奨学金制度等にコロナオキナワを通じて支給されるようにと大会会長代理の当協会渡邊専務理事より全額が玉木沖縄ポリビア協会長に手渡されました。

外務省の立ち入り検査

さる 2 月 16 日、当協会に対する立ち入り検査が行われ約 100 項目に及ぶ検査が行われました。

総合的評価として

- | | |
|-------------------|---|
| (1)法人の業務の運営状況 | A |
| (2)事業の内容及び実施状況 | A |
| (3)会計処理、収支及び資産の状況 | A |
| (4)予算及び決算の状況 | A |

とすべて『A』の評価を得ました。

多くの団体が企業賛助会員の退会等によりその運営に苦慮している中で、もともと支援団体の少なかったところから、役員は無報酬・無日当・交通費自弁という完全なボランティア体制を貫き、地道な活動を続けてきたことが評価されたものと思われます。

ソプラノ歌手宮良多鶴子さん

「ポリビア公演」報告コンサート

来る 8 月 6 日(日)国際文化会館にてー

昨年の暮れに当協会の会員である沖縄出身のソプラノ歌手・宮良多鶴子さんが自費でボリビアの日本人移住者の慰問に出かけられ、8日間の滞在で4回の公演を行われました。ご親戚がボリビア沖縄移住地に入植されたという縁もあり、長年温めて来られた夢を実現されたのですが、公演の幕が降りても帰らない聴衆の皆さんひとりひとりと握手をして宮良さんが見送られるというほどの大成功を納めました。これは宮良さんのやさしい心をボリビアの移住地のみなさんが、敏感に感じとられたがゆえの出来事であったと思います。

宮良さんは沖縄の滝廉太郎・またはフォスターといわれた『安里やユンタ』『えんどうの花』等の曲で知られる名作曲家・宮良長包先生の親族で、音楽を通して愛と平和を伝えようとした長包先生の意志を、正に現代に体现されておられ、今日まで、離島または施設や病院で多くのコンサートを行ってこられています。

すばらしい人柄が、にじみ出る語りと美声を当協会の会員の皆様にも、是非お届けしたいということで今回の企画となりました。宮良さんには、ソプラノ演奏の合間に、ボリビアへの思いや現地での公演の様子を存分に語っていただき、楽しいコンサートにしたいと計画しております。

8月6日の日曜日は Seis de Agosto ボリビアの独立記念日です。

新装なった国際文化会館の庭園を望むすばらしいホールで、定評のある料理を味わいながら、楽しくご歓談いただき記念日を祝っていただきます。

また今回のコンサートの収益金は全額「サンタクルス市日系人協会創立50周年記念式典」を支援するチャリティ資金に全額充当します。

会員および日頃ご協力をいただいております本土と沖縄におけるチャリティゴルフ参加者とその関係者に優先的にご案内するコンサートにしたいところから申込書を『カントウータ』に同封しております。残った席は、一般に開放する予定ですので同伴者の人数も明記されて早めのお申し込みをお願いいたします。

サンタクルス中央日本人会 創立 50 周年

祭事への寄付金の受付

サンタクルス市の中央日本人会は今年で、創設 50 周年を迎えます。ボリビアの開拓最前線の町として発展してきた同市は、ボリビアの農工業の中心的役割を担い、いまではボリビアの経済をリードする重要な拠点となっております。

日本人移住者の経済活動もこの市に集約されており、サンタクルス中央日本人会は日本とボリビアの友好上、重要な役割を担っております。

来る 9 月 16 日には、半世紀の慶事を記念する祭事が予定されております。

海外移住事業団や JICA での赴任時に同日本人会のお世話になった方も大勢いると思います。当協会ではこの祭事を支援するため、広く寄付を募りますので、お心差しのある方は、会費の納入に加えて「内創立記念祭分 0 0 円」と通信欄にお書きの上ご送金をお願いします。

(以上、事務局より)

ボリビア大統領就任式典

外務省 中南米局 南米カリブ課
津田文代

1. 式典概要

(1) 本年 1 月 22 日、ラパス市において、昨年 12 月の選挙により当選したファン・エボ・モラレス・アイマ新大統領の就任式典が行われ、わが国より有馬龍夫政府代表が特派大使として出席したほか、ルーラ・ブラジル大統領、キルチネル・アルゼンチン大統領、フェリペ・スペイン皇太子他、多数の要人が参列した。モラレス大統領は、今後 2011 年まで 5 年間の任期を務める。

(2) モラレス大統領の就任は、ボリビアの歴史上初の先住民出身の大統領の誕生となり、一連の式典においても先住民の文化・慣習に沿った行事が随所に取り入れられた点

が特徴的であった。

大統領就任式に先立つ21日、同国ティワナク遺跡（世界遺産）において、先住民の慣例に則った大統領就任の儀式が開催された。アンデスの伝統楽器の音色が響く中、モラレス新大統領はインカ帝国に先行するティワナク文明時代の意匠をあしらった伝統衣装に身を包み、アイマラ先住民の司祭らより杖を授与された。儀式には、各国より先住民団体代表約1万人が出席した。

22日に開催された大統領就任式では、モラレス大統領は民族衣装をモチーフにしたジャケットを身に纏って出席し、内外の注目を集めた。

2時間弱に亘る就任演説において、モラレス新大統領は、植民地時代以降虐げられてきた先住民の歴史を変革する時期を迎えたと述べ、社会的不平等・不正の改善、汚職撲滅、貧困削減等に向けた各社会層の一致協力を呼び掛けた。

なお、従来の大統領就任式においては、新大統領は指で十字を切り、「神の名において」宣誓を行うのが慣習であったが、今回の式典においては大統領、副大統領共に右手を左胸に当て、「それぞれの有する政治的及び宗教的信条に従い」宣誓を行ったことも特徴的であった。

2. シャノン米国務次官補との会談

大統領就任に先立つ21日、モラレス新大統領はブッシュ米国大統領特使としてラパスを訪問したシャノン米国務次官補と会談を行った。記者会見において、シャノン国務次官補は、今回の会談の目的は、モラレス新大統領に祝意を表し、新政権の成功を願うと共に、米国政府側に対話の用意があることを伝達する点にあったとし、共通のアジェンダに基づき取組を進めていけるものと確信している旨述べた。

3. ラゴス・チリ大統領との会談

3月にバチエレ新大統領へ大統領職を引き継ぐラゴス・チリ大統領が、同国大統領としては55年ぶりにボリビアを訪問し、高い注目を集めた。

モラレス新大統領は22日、ラゴス大統領

と会談し、「海への出口問題」に関し、徐々にこれらの歴史問題に加え、チリとの経済、外交、通商関係を検討していくことを希望する旨述べた。

この後、バチエレ・チリ新大統領の就任式にモラレス大統領がボリビア大統領として初めてチリを訪問し、冷却していた二国間関係改善の気運が急速に盛り上がりつつある。

4. 有馬政府代表の就任式出席

(1) ロドリゲス大統領への信任状奉呈

21日、わが国より大統領就任式に出席した有馬特派大使は、離任するロドリゲス大統領に信任状を奉呈し、同大統領に対し、政治的に困難な状況下で急遽大統領に就任することとなったにも拘わらず、総選挙の前倒し実施等、短期間に大統領としての重責を立派に果たしたことへの敬意を表し、同大統領よりこれに対する謝意が表明された。

(2) 有馬特派大使とモラレス新大統領との会談

23日、有馬特派大使はモラレス新大統領との1時間弱の会談を行った。

同会談において、有馬特派大使より、モラレス大統領が幅広い国民の支持を得て民主的に選出されたことに祝意を表するとともに、わが国は天然資源管理政策や麻薬不正取引の防止等の新政権の政策に注目していく旨伝達した。その上で、わが国は、新政権との対話を通じ、ボリビアの国造りを支援していく用意があると述べるとともに、ボリビアにおける日系社会の福祉・安全に対する配慮を要請した。

これに対し、モラレス大統領より、わが国のこれまでの経済協力に対する深甚な謝意が表明された。また、外国投資に対する法的安全性を確実に保証するとともに、今後様々な分野において両国関係を緊密化していきたいとの発言があった。

なお、同会談にはガルシア・リネラ新副大統領が同席した。また、有馬特派大使との会談が、モラレス大統領就任後最初の二国間会談となった。

5. まとめ

(1) 大統領就任式典について

(イ) 今回の大統領就任式は、新たに選出された議員が民族衣装や鉱山労働者の作業服等、様々な服装で出席したり、宣誓式の会場となった英雄広場には、全国各地より大群衆が詰めかけたり等、プロトコールに拘泥することなく自由な雰囲気の下で行われ、モラレス大統領の言葉通り、新たな時代への変革を体現するものとして受け止められた。

(ロ) わが国との関係では、有馬特派大使が宿泊先のホテル及び式典会場を出発する度に、詰めかけた多数のボリビア市民が“ ! Japon! ”と大きな歓声を上げ、熱烈な歓迎を寄せていたが、良好な対日感情が一般国民の間にも広く浸透していることが伺えた。

(2) 今後の展望

(イ) モラレス大統領は就任後、メサ前政権以来懸案となっていた憲法改正議会招集特別法及び地方自治に関する国民投票実施法をいち早く成立させるなど、一定の成果を上げているが、未発表の経済開発5カ年計画を始め、対外貿易政策等、経済面での具体的な政策は打ち出されておらず、今後の動向を引き続き見守る必要がある。

(ロ) 対米関係については、チリにおけるライス米国務長官とモラレス大統領との会談実現により、二国間対話の気運が更に高まったものの、モラレス大統領は米国に対する批判的な発言と宥和的対話の姿勢を交互に繰り返しており、麻薬対策等の懸案事項については進展が見られていない。また、識字率向上、身分証明書無料発給キャンペーン等、ベネズエラ及びキューバの影響を大きく受けたと見られる政策が採用されており、今後両国との関係にも着目していく必要がある。

(ハ) 今回のモラレス大統領の就任は、先住民人口が6割を占めるボリビアにおいて、最初の先住民出身の大統領による統治であり、その成否は今後のボリビアの政治の歩みに大きな影響を与えうる。 (了)

左から、リネラ新副大統領、モラレス新大統領
有馬特派大使、白川駐ボリビア大使

ボリビアの話題

モラレス新大統領就任 先住民からは初の選出

今年の年頭に行った就任演説では、50年代まで国会議事堂はもちろん中心広場にも入れなかった先住民が、いわば“2級市民”から抜け出した新時代に入ったことを強調した。46歳という年令が物語るように、政治家としてのキャリアは長くも重くもないが、コチャバンバ県のチャバレ地方でコカ葉農民団体にサッカーチームを率いたのを手始めに、先住民組織や鉱員団体と接触を深め、反政府運動を現在の政府与党「社会主義運動(MAS)」にまで拡大した。

97年には下院議員になり、昨年末の大統領選挙では白人のブレーンのアルバロ・ガルシア氏を副大統領候補に推して圧勝してみせるという手腕家ぶりを発揮した。アルバロ氏も43歳という若さだから、46歳の大統領は人種も超えた“若々しいボリビア”を実現して見せたことになる。

実際、ボリビアは少数のスペイン系家族が国の富と政治を握るので知られてきたが、モラレス氏をはじめ、新しい指導部は「電

気もなく読み書きを知らない先住民の解消」「水資源など最低限の財産の民営化禁止」などを就任演説で強調。人種差別、搾取、憎しみ、暴力などが常識のように通用していた“古き封建的な社会”からの決別を宣言した。

もちろん、キャリアの浅さとか封建的保守派の抵抗とか、前途多難を思わせるものは山積みしている。これを任期の5年間にどう解決していくか、中南米諸国の注目の的である。

学校給食に栄養満点のコカの葉を

2006年2月10日のボリビア紙『ラソン』によると、ボリビアのチョケウアンカ外相は、学校で朝食に出される給食にコカインの原料となるコカを取り入れるよう提案した。「コカの葉は牛乳よりカルシウムが豊富で、魚よりリンを含んでいる」と外相は強調し、成長ざかりの子供達に与えるべきと主張。国際社会に効用を理解してもらうためにも、給食にコカの葉が使用されるよう申し入れた。

新刊書ご案内

『コンドルの舞う国』ボリビア移住記

安仁屋晶著

サンファン日本人移住地入植50周年記念が昨年盛大に開催されたが、著者の安仁屋晶さんは第一次沖縄移民として1954年22歳でボリビアへ移住した。それから今日までの日々を一冊の本にまとめられたのが本書で、しっかりした記録をもとにしっかりした筆で書き綴った貴重な“移住記”である。

安仁屋さんは1932年沖縄に生まれ、第二次世界大戦が激しくなった1944年には熊本県へ学童疎開。終戦になり沖縄に帰った。そして第一次移民に加わり、400人の仲間達と一緒に51日の船旅の後ボリビアに到着。ここからが大変な毎日で、現在の繁栄をみる移住地の第一歩はいかに苦悩の連続であったか、涙無しには読み進むことが出来ない箇所もある。井戸を掘れ

ば塩分が強い水のため、飲み水は遠くから運んでくるのが大仕事だったと書かれているが、水にはじまり日々の生活も苦勞の連続だった。読んでいてホッとしたのは、当時の大統領ビクトル・バス・エステンソロが護衛も連れず、ハーフトラックで移住地を視察してくれたということ。“沖縄移民の父”と呼ばれた大統領に守られていたこともラッキーといえよう。

ボリビアに、いや南米に関心がおありの方には是非ご一読いただきたい貴重な一冊である。

ボリビア百話

ボリビア - 国土の大半を失った国

- その6 -

高畑敏夫

元ボリビア大使

ボリビアのゴム産業

しかしその一方で、1913年には同市から2,000キロほど離れたところで、5年の歳月と数百万ポンドの経費と6千人もの人命を費やして建設されたマデイラ、マモレ間の全長350キロの鉄道の開通式が行われていた。この工事は1908年にブラジルとボリビアとの国境で開始されていたもので、鉄道の開通により、ゴムはベニヤマドレデディオスからアマゾン河を船で遡行できるようになる予定で、アクレとマドレデディオスに貯蔵されていた膨大な量のゴムがここから流通経路に乗る手筈であった。

当時ボリビアにはスアレスとアラーナという2人のゴムの大立者がいた。スアレスは裸一貫から財を成し、アマゾニアでも並ぶものなきゴム林経営者に成り上がった。ボリビアに8万平方キロのゴム林を、またベニ川沿いにリベラルタとビリャベリャという2つの町を持ち、さらに「スアレス兄弟社」の略号を押された1連の中継所をすべて保有し、ここに発着する彼の船がマデイラ川の輸送を独占していた。スアレス7人兄弟の末弟が会社の軍隊を率いてカリブナ

族の領域に侵入し、そこで殺されたときには、報復として 300 人のカリブナ族が虐殺された。

アラーナはボリビアはゴム市場から遠過ぎることに気づいており、マデイラ、マモレ鉄道の建設を支援し、また、1905 年以降、コロンビアとペルーとの間の領土紛争の中心地であったプトゥマーヨで 3 万平方キロのゴム林を取得し、さらに本社をロンドンに置いて株式を公開したりした。アラーナはカリブ海地域で兵士を徴集して私兵団を結成し、3 万人ものインディオを誘拐し、会社の所有する村に幽閉した。

合成ゴムの開発

天然ゴムの覇権はブラジルから英国に移っていたが、さらに他の国がこの覇権を奪おうと図るのも自然の成り行きで、この度は天然ゴム栽培の拠点を持たず、生ゴムの入手に苦慮していた米国やドイツなどを中心に合成ゴムの開発という形で始められた。

合成ゴムには

東南アジアやアマゾン圏だけではなく、世界のどこでも生産可能なこと

天然ゴムでは得られない種々の性質のものが得られること

生産性が高いこと

など多くの利点があるが、これが使われるようになったのは第二次世界大戦のころからで、その後も急速に発展し、現在では 100 種類以上もの合成ゴムが市販されている。

合成ゴムの研究は天然ゴムの模倣から始まった。ウィリアムス (C.G. Williams 1829~1910) が 1860 年に天然ゴムを乾留によって液状に分解し、イソプレンを単離してこれが天然ゴムの構造単位であること明らかにしたが、79 年にはフランスのブーシャルダ (Gustave Bouchardat 1842 ~ 1918) がイソプレンを加熱重合するとゴム状に変化することを発見し、さらにティルデン (William Augustus Tilden 1842 ~ 1926) はテレピン油から得たイソプレンを重合してゴム状物質を得た。

その後 1910 年代の初頭にかけてイソプ

レンに似た物質の合成や、イソプレンやこれらの類似物質の重合技術が発達し、天然ゴムに類似するゴム状物質、すなわち汎用合成ゴムを作る方法が研究的にはほぼ確立された。ナイロンの発明者として知られる米国デュポン社のカローザーズ (Wallace Hume Carothers 1896 ~ 1937) は合成ゴムの分野でもネオプレンを開発し、1931 年に工業化に成功している。即ちドイツでハーバー博士が空中窒素の固定法の開発に腐心していたころ、米国やドイツで合成ゴムの開発も懸命に進められていたのである。

1914 年にドイツは第 1 次世界大戦に対処するためにメチルゴムの工業化に取り掛かり、2,3 - ジメチルブタジエンの重合を行った。その品質は粗末なものであったが、シュタウディングー (Hermann Staudinger 1881 ~ 1965。1953 年にノーベル化学賞受賞) が高分子の概念を提唱した 1926 年よりもはるか以前に高分子の 1 種である合成ゴムが製造されていたことは驚くべきことである。

第二次世界大戦では 1942 年の 4 月までに日本がマレーやインドネシアのゴム生産地を制圧したため、米国は必死になって短期間のうちに合成ゴムの生産を達成した。

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで NO.9

杉田房子
旅行作家

インカの国から帰ってきて、大司教がいないのを残念がる神父の土産話を聞いていた教会のものは、しきりに首を振った。「こういうことが、もうすでに本国に伝わっていればよいが。なんと言っても、芽や葉の毒は、気がつきにくいものです。それに、黒と白の石さながらに乾燥すれば腐らない工夫や、山地で取れるが、生でも長く保つ不思議さは、良く調べさせる必要がありますでしょう」

スペインに送る山地と平地のパパスと、黒と白の石のようなチュノとを別々に詰め

た大袋を傍らに、神父はインカでの見聞と、この奇妙な植物のことをせっせと書き綴った。

たぶん、神父はスペイン人がクロニスタと呼んだ年代記録者の、初期の一人に入れられるだろう。文字を持たないアンデスの人々のことは、はじめはスペイン軍の将兵で読み書きのできるものが見聞を記し、次に布教の聖職者や行政に当たる官吏が書きとめ、さらにインディオの長老の口伝や、チャスキの飛脚などの物知りから、記録専用のものが聞き書きした。

しかし、神父も将兵と一緒にインディオの中へ進んでいったごく初期には、書き留めるものも自分がクロニスタなどとは思っても見るはずはない。

クロニスタはそういう初期のものも一緒に含めている。ジャガイモを「インディオ同士でも結構な贈呈品とされる」と記録者の一人のアステラノは 1536 年に書いた。「ゆでたものは栗の味と感じがそっくり」とデ・レオンは 1538 年に記した。伝聞なのか体験なのか、記録した年のことなのか、それ以前なのか、いずれも漠然としている。

多分そうしたクロニスタの一人に入る神父は、せっせと書き綴りながら、町のうるささに顔をしかめた。

パナマは、神父がインカの国に出発した数年前と段違いに大きくなっている。1513 年 9 月 29 日、スペイン本国が聖ミカエル祭を祝う日に、29 日ばかりでパナマ地峡を越えた冒険者バルボアは、ヨーロッパ人で始めて太平洋岸に立った。バルボアは 4 年後に殺されたが、町は育ち続けている。ここからインカ征服に向かうことになったアルマグロ将軍がピサロ総督と対立して殺される 1538 年にかけて、町にはスペイン人だけで 1 万人近くがいた。この港町を 1671 年に襲撃したイギリスの海賊モーガンは、スペイン市民 3 万人と 7000 戸の家に 200 の倉庫が並ぶ賑やかさに驚嘆している。

何しろ、パナマという名の由来さえ、もうはっきりしなかった。土地のインディオが言う「海の魚がいっぱい」のパナマ、金銀があるところは「遠い遠い」のパナマ、太平洋をバルボアが始めて望見した丘に茂

っていたパナマ木……。そういった町の由来などはもうどうでも良く、総督や将軍に習って一旗上げるのに熱中したものばかりが集まっていた。

神父は、インカから連れてこられたインディオを、思いだした。雑然とした町で、すくんでいるに違いない。慰めにいってやろう。そうだ、スペインへの旅立ちにはパパスをたっぷり持たせてやらなければ、と神父は考えた。

実際、インカからつれてこられたインディオは驚いたり、すくんだり、ぐったりしていた。

インディオはパパミククーじゃがいも食いのはずだが、パナマではヤムイモが主で、それも暑さと湿気のせいかわべちゃつと粘る。とうもろこしはその逆で、小さな粒がやたらに固かった。長い旅をするといわれているので、持ってきたジャガイモは大事にしているが、このうるささでは食欲がなくなってしまう。

ピラコチャのスペイン人は、肌色から顔形まで同じインディオとしか思わないが、インカとパナマでは、インディオの言葉も習慣も違った。インカはケチュア語族だがパナマではチブチャ語族で、話はまるで通じない。インカのアンデス山地は白雪がなくても凍る風が吹きすさぶのに、パナマは山地でもむし暑い。インカの男女がはいている皮サンダルをはだしのパナマのインディオは目を丸くしてみた。

好奇心ならしも、違う種族に敬意を示すものもいたパナマのインディオとの暮らしが終わり、町を後にすると神父から告げられたときは、実はほっとしたくらいだった。

(つづく)

リレー随筆-第3回-

ボリビアの日本語

武庫川女子大学 生活美学研究所
助手 柏木 舞子

ボリビアに滞在中のある日、たしか日系

人家庭の結婚披露宴に招待されたときの出来事だった。同じテーブルで食事をしていた日系3世からの質問に、わたしは困惑した。

「日本語で、数字の『4』は、『よん』と『し』っていうふたつの読み方をするけれど、どちらが正しいの？」

「『よん』も『し』も、どちらも正解ですよ！」と言おうとしたところで、ふと考えた。(葬儀の「四十九日」は、「よんじゅうくにち」とは読まないしなあ……。)

結局「前後の文字や、言葉の意味によって、読み方が『よん』か『し』かが決まる」という、茶を濁すような、あいまいな説明におわった。23年間も日本で生きてきたにもかかわらず、うまく答えられなかったことに、バツが悪い。そんなとき、パッと話題をきりかえて、笑顔でダンスの輪に誘ってくれる、彼らのあっけらかんとしたやさしさがうれしかった。

コノニア・オキナワの大豆畑

周知の通り、ボリビアには多くの日系人が居住している。とくに、東部のサンタクルス市周辺には「コロニア・オキナワ」「コロニア・サンファン」という2つの移住地が拓かれ、第二次世界大戦後の移住者とその子孫が居住している。そこでは、日本語教育もさかんである。日本アニメやカラオケの普及もあいまって、日系2世、3世の日本語の能力は、他の南米諸国と比較して相対的に高い。彼らは、日本語ということばを客観視する力をもって、上記のようなあいまいな表現に気づくようだ。

また日本語の単語に、独特の意味づけを

して用いることもある。

たとえば「山」という名詞。日系人たちが居住するコロニアには、山がない。しかし彼らは、平地に木が生い茂ったジャングルを指差して「山だ！」という。これは、日系1世のお年寄りたちも同様である。

それならば本物の山は、何と表現するのだろうか。ある日、その疑問を解消するときがやってきた。みんなでサンタクルス市郊外のサマイパタという高地へでかけた日のことである。車で市街地を抜けると、緑のなかに所々赤土が露出した山々が連なる風景へとかわった。すると車中に居合わせた人たちが「山だ！」と景色をみながら、嬉々としている。木がたくさん生い茂っているところは、土地の形状にかかわらず、すべて「山」と呼ぶのだということがわかった。

そんなふうに、ボリビアの日系社会での生活には、日本語が新鮮なものに思える瞬間があった。当たり前のように用いてきた日本語を、スペイン語の中で耳にすると、そのむずかしさや奥のふかさがよりいっそう際立ったものを感じられた。

サンタクルス市街にある日本語学校では、教室の壁に生徒が詠んだ短歌が掲示されていた。どの作品も、漢字の細かな線にまで気を配って、ていねいな筆圧で記されていたのがほほえましい。そのうちの一句に、ふと目がとまる。



コロニア・オキナワの夕焼け

いつの日か 帰ってくるのを楽しみに
遠い日本で働く父よ

日系人社会では、单身、あるいは世帯で、

母国である日本に赴いて働く人も多い。彼女の父親も、その状況下にあるのだろう。短歌の中に、日本をまなざす真摯な想いを感じた。

日本からボリビアのサンタクルスまでは、飛行機を乗り継いで約 30 時間かかる。1950 年代、ボリビアへの移住が開始された当初は、航路と陸路で 3 ヶ月あまりの旅を経てたどりついたというから、昔に比べてずいぶん短い時間で行き来できるようになった。しかし両国が、丸い地球の対極に位置することにはかわりはなく、やはりボリビアからは「遠い日本」なのである。

この率直な 31 文字が心に残ったのは、母国語として日本語を使うわたしが、日々ことばの装飾に拘泥し、忘れかけているすなおさを、そこにみたからだと思う。

(次号から柏木舞子さんが、ボリビアの日系移住地コロニア・オキナワにおける生活様式と価値観のジェネレーション・ギャッ

プに焦点を当てた「親の想い、子の選択」と題する学位論文を連載致します。ご期待ください。)

編集後記

ボリビアで体験なされたことなどお書きになってお寄せください。原稿は 800 字から 1200 字でお願いします。

なおパソコンを利用できる方はワープロで原稿を作成し、E-mail またはフロッピー、メモリースティックなどでお送り下さると大変ありがたいです。自己紹介の意味でボリビアとの関わりを数行お書き頂いた上で本題に入っていただくとありがたいです。

よろしく願いいたします。

.....

(編集委員)

杉田房子委員長、大貫良夫、細野 豊

(広報委員)

渡邊英樹、長嶺為泰、細萱恵子